2020年6月7日
聖霊降臨節第2主日

家庭礼拝のための

聖書・牧会祈祷・メッセージ

【 聖 書 】

ローマの信徒への手紙１４章１３節～２３節 （新約聖書 ２９４頁）

【牧会祈祷】

命の源である神様

私たちは1週間の旅路を終え、こうしてあなたのところに戻ってきました。私たちが自分の疲れや魂の飢えに気がつかなくても、神様は全てを知り「帰ってきなさい」と、呼び集めてくださいます。心から感謝いたします。この礼拝を通して、私たちを癒やし、愛で満たしてください。

今、世界は混乱しています。新型コロナウイルスによって、これまでと同じような生活ができなくなりました。仕事を失い、経済的な危機に陥っている人が大勢います。心身の弱りを感じている人や、長く家族と会えない生活をしている人もいます。子どもたちは学校が始まり嬉しいことですけれども、授業の遅れや人間関係に不安を抱えている子どももいるでしょう。神様、どうかこの地に生きる人々を助けてください。主は私たちを不幸に陥れる方ではありません。このことを通して、主が私たちに何を求めておられるのか、気がつかせてください。

アメリカでは、人種差別によって命が失われ、デモが続いています。差別は個人の心の問題だけではなく、人によって生み出され、社会に根を張り、そのままにされてきた罪です。神様は私たちの罪を赦し、清めてくださったはずです。どうか、私たちが隣人たちと和解し、互いを尊重して生きられるようにしてください。

今、入院している友や調子を崩している友の傍に神様がいてくださり、回復へと導いてくださいますように。家庭で礼拝を守っている友を祝福してください。

このお祈りを主イエス・キリストのお名前を通して御前におささげいたします。

アーメン。

【メッセージ】

今日の聖書は食べ物のことが話題の中心となっています。食べ物の中でも肉とぶどう酒が取り上げられています。ユダヤ人キリスト者は市場に売っている肉を嫌いました。ユダヤ教の規則では、血を口にすることは生き物の命を奪うことでした。ですから、ユダヤ人たちが食べるのは、ラビのもとで徹底的に血抜きをした肉だったのです。ローマの肉市場にそのような肉はおいていなかったでしょうから、彼らは肉を食べないようにしていたのです。食べる人は食べない人を「古い慣習に縛られた哀れな人」だと思ったでしょうし、

食べない人は食べる人を「自ら自分を汚す不遜な人」だと思ったでしょう。パウロは、汚れているものなどないし、食べること飲むことによって私たちを汚すものなどないと宣言します。むしろ私たちの心の内から出てくるものが自分や人を傷つけ、神様との関係まで壊していくのです。

この箇所は、互いを罪に陥れないように食べない、飲まないことが推奨されていると解釈されてきました。しかし、それでは、食べない飲まない人の方が清く、清い人に合わせなさいということになります。イエス様の言葉「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出てくるものが、人を汚すのである」と逆になってしまいます。

むしろここは食べない・飲まない大胆さをひけらかすな、食べない･飲まない人を弱いと言って見下すな、と解釈するべきでしょう。そして、そのような誘惑にあらがえないようなら、肉を食べず、ぶどう酒を飲まないほうが望ましいとパウロは言うのです。

ここのテーマは食べ物のことだと最初に言いました。けれども、よく読んでいくとここは兄弟たちとどのような関係を結ぶのかがテーマになっていると分かります。私たちは自分の価値観にあわない人がいると、その人との優劣をつけようとします。相手が上のように感じて卑屈になることもあれば、相手を見下して溜飲を下げることもあります。人を見放す一方で、私たちは相手を無理矢理自分の好む形に仕立て上げようと躍起になることもあります。そんな自分にぞっとして、よくないことだと反省したり、落ち込んだりするのです。

私たちと他者との間にあるのは、揺るぎやすいヒューマニズムではありません。「キリストがこの人のために死んだ」という厳然たる事実です。キリスト者はこの事実によって、人との関係を築くことができるのです。

19 節以下に「だから、平和や互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか。食べ者のために神の働きを無にしてはなりません」とあります。向上と無にするという言葉は対になっています。向上は建物を建て上げるという言葉が使われていて、無にするは解体という言葉が使われています。パウロはこう伝えているのです。「隣人は神様が建て上げようとなさっているもの。あなたが解体してはならない」。そしてそれは私たち自身にも向けられるのでしょう。「あなたは神様が建て上げようとなさっているもの。あなた自身が解体してはならない」と。

本当に大切なことは 17 節にある「神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜び」です。神の国とは、土地や場所ではありません。神様が生きてこの世界に働いてくださっていて、私の主となってくださっているということです。それは、飲み食いのこだわりの中で分かることではありません。神様があなたを用いて、この地で義を実現させてくださる、あなたが失った平和を神様が回復してくださる。今の状況が幸いか不幸かによって変わることのない喜びを与えてくださる。それによって、私たちは自分が神様のものであることを知るのです。

他者の自由を嫌々まねすることも、自分の自由を押しつける必要はありません。神様が愛しておられる。神様がご自分のものだとしておられる。それが「私」であり、「他者」なのです。